

# 令和6年度

## 第1回丹後「子育て」サポート協議会の概要

1 日時 令和6年5月20日(月) 14:30~16:30

2 場所 京都府宮津総合庁舎 別棟2階講堂

3 出席者 丹後「子育て」サポート協議会会長

安藤久美子(京都府丹後教育局長)

丹後「子育て」サポート協議会顧問

杉岡秀紀(福知山公立大学地域経営学部准教授)

丹後「子育て」サポート協議会委員5名

多々納智(京都府宮津天橋高等学校 教諭)

野木俊宏(京都府立丹後海と星の見える丘公園 園長)

櫛田 啓(社会福祉法人みねやま福社会 常務理事)

関奈央弥(合同会社 tangobar 代表社員)

稲本朱珠(与謝野町高校魅力化コーディネーター)

各市町教育委員会担当者

事務局(丹後教育局)



4 協議の概要「丹後の『子育て』関係者の協働を生むための協議会理念の発信について

~キーワード「大人の枠を外す」「対話」「許容・度量」をもとに~」

(1) 「子育て」に関わる大人で共有したい理念の焦点化

ア 目指したい理想の丹後「子育て」環境について

- ・自然体験活動で丹後の子どもと都会の子どもを比較しても自然豊かな丹後で育っている子どもだから何かに長けているという感じはあまりしない。違いが生まれないのは丹後の大人が都会と同じようなことをさせているからではないか。違いを求め、丹後の子ならではの関わり方をしたいと思っている。
- ・できれば丹後で育った子どもには、地域を愛し、丹後と関わりたいと思って巣立ってほしい。
- ・丹後の子どもは大人が思う以上に地域のことを知らないと感じる。
- ・理想としては、自然環境、人、文化をどれだけ活用できるか。丹後にあるヒト・コト・モノをちゃんと使った「子育て」をする。また、活用できる体制がとれるか。さらに、その体制をつくっていけるか。地域資源を活用できるのか。活用しきるためには行動力が必要になってくる。
- ・子どもが外へ出て様々な体験をするためには、大人が仕組む必要がある。経験として何かをするのとしらないのでは違う。そして、どれだけ動き、どのように動いているかも重要である。

- ・子どもは、実感を伴った経験によって自分の言葉で語れるようになる。また、経験が自分の可能性を広げることへもつながる。
- ・「地の利」は「子育て」環境のキーワードとなる。丹後の自然、コミュニティ、場に価値がある。
- ・子どもたちが自分でチャレンジする環境を整えたい。親も任せられる地域である未来がよい。よい意味で子どもに関わってくれる大人がいる丹後を目指す。
- ・市町の教育ビジョンに関わっているが、丹後で子どもを育てたいと思う人を増やしたいと考えている。「やっぱり子育てするのは丹後でしょう。」という思いをもってもらいたいと思っている。
- ・そのためには価値創造が必要と考えている。例えば丹後の豊かな自然を相手にすることで、結果が思うように出ないこと、失敗することがある。自由にやってみて失敗するという経験を繰り返せる環境、体験には価値がある。丹後は地域に出て学ぶことができる。

#### イ 現代の環境で育った丹後の子どもの様子について

- ・私たちは、ネットで調べることができなかった世代。情報がない中でも工夫して自分の創りたいものを創る工夫を経験していた。今は何でも調べることができるから、「知っている」という頭でっかちになる。
- ・今の児童生徒は、やり方がすべて分かっている。それがよいのか。臨機応変に対応できる力が身に付きにくいのではないか。
- ・知った気である子どもの様子に課題を感じる。学習等に ICT を利用することに慣れていても、実は検索能力は、低いのではないかと感じることもある。無自覚にリコメンドに影響され、フィルターバブルやエコーチェンバー(※1)と呼ばれる現象があるように AI によって検索範囲を勝手に狭められている。

#### ウ 子どもに育てほしい力

##### (ア) 主体性

- ・一人一人が行動できる力をどうつけていくのか。その行動力はまず、大人が身に付けていないといけないのではないか。
- ・臆病な子どもがいれば、大人がやってみる、やってみせる。そこから子どもも行動できるようになるのではないか。
- ・確かに大人が実際にやって見せると子どもはできる。例えば電話のかけ方一つにしても同じ。できなかったことが、やって見せるとすぐにできることもある。
- ・ある就学前施設では、子どもに様々な体験をさせていた。ある子どもが、周りの友達がやっていることを見ることで、自らも行動し、チャレンジする姿があった。
- ・家族で過ごすときも、子どもに積極的に体験させる意識をもつことが大切である。

### (イ) 創造性

- ・企業の多くがコンピテンシー（※2）採用を実施している。創造力とともに目の前の出来事に対して、課題を見つけ、解決していく力を求められている時代にある。結果として子どもの育ちをどうつくるのかが大人に問われている。
- ・就学前施設の子どもを見ていると、創造力を十分に備えていると感じる。しかし、育つにつれて、それが狭まっているのではないかと疑問に思う。
- ・我々大人は、子どもが行動することに蓋をしまいがちである。これまでに決められた規則・規範が、その創造力を発揮する機会を分断してしまっている。
- ・京丹後市の取組「Kyotango Sea Labo」に関わらせていただくと、子どもの意思や目的から始まる探求によって、創造性は育っていくのではないかと思う。

### (ウ) 自信

- ・「自信」も丹後の「子育て」のキーワードになるのではないか。
- ・自信は経験でしか身に付かないと感じる。自分は「生きていける」という自信をもてる体験をできるか。丹後の子どもも多くは、丹後を離れることになる。そのとき、どこに行ってもやっていけるための自信や誇りを身に付けてほしいと思っている。
- ・丹後を離れて見えることや分かることはあるが、丹後を味わい尽くして、丹後を離れてくれればと考えている。

## エ 大人が自覚したい丹後のよさ

### (ア)丹後の特徴

- ・高校生の探究活動に関わって、活動のためは、校外に出てもよい。しかし、これは都市部の学校では簡単ではない。地域に出ることが地域にも許される環境は恵まれている。
- ・丹後には子どもたちの中に、「地域」というイメージがある。それが安心できる場所としての「地域」につながっているのではないか。都市部では「地域」というもののイメージがないところもある。
- ・受け継がれてきたコミュニティの力がある。
- ・自分の育った環境も含めて、昔は地域の見守る目があったと感じている。例えば、川で勝手に釣りをしても怒られないなど、地域が見守ってくれていた状況があったし、親もその地域の目に任せていた。
- ・今でも都市部に比べたら、地域が見守る目は十分ある。「あの大人のところには、子どもを任せられる」というような感覚が丹後には残っている。

### (イ) 丹後の大人へ伝えたいこと

- ・丹後は人が育つ環境に恵まれているという自覚を大人がもつ必要があるのではないか。
- ・都市部から移り住んだ者としては、丹後の大人には丹後のいいところに気付い

- てほしいが、気付き方にもポイントがあると思う。経験値として「おもしろい」と思えることに出会えるかどうかは重要である。
- ・丹後の大人の中には、他地域に対する劣等感を抱えているような卑屈さを感じる人がいる。大人が共有するのは、「丹後はええとこや」と自覚し、胸を張ってそう言えることの大切さではないかと感じる。
  - ・地域の大人に「自分たちが、この丹後を創ってきた」という自信をもってもらいたい。
  - ・大人が丹後のよさを理解した上で、子どもにどう感じさせるのか、どう伝えるのか、どう対話するのか、それぞれ考えなくてはいけない。
  - ・子どもとして様々なものを敏感に感じられる時期に、何を感じさせてあげられるかを考えるのは大人の責任である。欲求に働きかける視点を持ちながら関わることができるといい。

#### オ 学校教育と協働するための「子育て」の視点

- ・学校教育には子どもが聞きたいと思える授業を求めたい。学校は子どもが学びたいと思える情報を提供する場であるべき。
- ・子どもたちの興味関心がどこにあるかを大切にしたい。しかし、その一方で、子どもの興味関心にばかり意識が集中しすぎると集団的な活動が難しくなるという思いもある。バランスは考えなくてはいけない。
- ・規則に縛られたマニュアル・指示では機械的な人間が育つのではないか。
- ・小・中学校段階で自由と責任についても学べたらいいと思うが、枠組の多い学校教育では難しいのではないか。自由を与えられ、その自由の中で様々な経験をさせようと思うと、学校以外の家庭や地域の中での体験となるのではないか。
- ・学校とまちの協働という視点が必要である。
- ・例えば、授業として職業体験に行くにしても、そこで働いている人たちの熱量に触れさせる。学校や企業も本気で本物にふれさせようとする。『成功に説明はいらない。失敗に言い訳はいらない。』というナポレオン・ヒルの名言があるように、そこに言葉はいらない。
- ・色々なチャレンジをしている人々や地域を思い、行動している人々の生き様に子どもを出合わせる。子どもと熱量がある人とのつながりをつくっていく。
- ・高校生の多くが地域課題についての探究活動を行っている。その活動の中で頑張っている丹後の大人に出会わせてあげること必要だと考えられる。
- ・現状として、高校生の中には、まだ総合的な学習の域から抜け出せず探究活動に至らない生徒も見受けられる。高校1年生の探究活動の一環で、体験型プログラムを実施するが、小・中学校でも実施できると思う。その中で、その世代から企業にも触れさせることもできる。
- ・今、教育観の転換が求められている。

## (2) 次年度以降の発信を含めた構想づくり

### ア 次回の協議に向けて

- ・丹後での「人との出会い」はポイントになるだろう。
- ・「子育て」のための協働ができる環境を目指す上で、まず、こういった方々をターゲットとして発信することが有効か、どのような伝え方が必要か協議する。

### イ ロードマップについて

提示したロードマップ(案)をもとに、今年度の協議の中で、次の段階も見据えたロードマップを完成させる。

## 5 指導助言(杉岡顧問)

### (1) 本協議会の魅力

- ・この協議会には哲学的な対話があり、未来の教育環境を作っていくプレイヤーの皆さんならではの考えがある。同時に、私たちは、未来に責任を持たないといけない。
- ・新委員の人選や管轄外の私立高校にも高校生意識調査アンケートの協力を依頼して実施するところなどに丹後教育局の慧眼を見た。
- ・「今まではこうだから」「周りがこうだから」「国がこういうから」という発想ではいけない。
- ・高校生意識調査アンケートを含めて、本協議会の協議内容は、今後、小学校・中学校にもつながっていくのではないか。

### (2) 高校生意識調査アンケートについて

- ・日本財団18歳の意識調査の結果を前回と比較すると「自分は大人だと思う。」はポイント減、「自分は責任がある社会の一員だと思う。」はポイント増、「自分の行動で国や社会を変えられると思う」もポイント増となっている。
- ・どのような調査も経年で見て行かないと分からない部分がある。高校生意識調査アンケートも続けていくことに価値がある。今後はさらに、丹後の子どもが都市部に出てから、どういう成長・変化をしていくのかを追跡することも必要ではないだろうか。

### (3) 各委員の意見について

- ・丹後は恵まれているという自覚をもつべきだと考えている。
- ・教育には、心理的安全性に加えて「文化的」安全性も必要になるのではないか。
- ・子どもが現代の不健全さによる病に侵されないための大人の責任は大きい。
- ・小・中・高の切れ目ない6・3・3の探究のデザインができるのではないか。今は校種ごとに切れ、関係者や伴走者が頻繁に変わっている状況があるが、小・中・高の個人の好奇心を12年間通して追っていくことも可能かもしれない。
- ・丹後には社会教育、学校教育の溝を埋めるポテンシャルがあると感じている。学校と地域社会が有機的につながることを実現できる可能性を感じる。
- ・学校は「～べからず。」で埋められている。そこを解放してあげることが必要では

ないか。子どもと大人がともに責任を負うようにならないといけない。

- ・現代の子どもの時間は、スマホに奪われることがある。人気ゲーム機の後継機も発売されるという情報もある。情報機器をもって自然体験をしようというのも不思議ではなくなるかもしれない。
- ・ネットの発達により情報量が多い故、身近なことを知らないことがある。
- ・地域の行事も含め、参加することにより、知らないことを自分で知ろうとすることが求められる。「無知の知」を知り、有知の知とすることで自信が得られることもあるのではないか。
- ・丹後の地域資源の活用については、不十分だと感じている。活用のためには民間や文化、スポーツなどでつながることがよいのではないか。
- ・丹後の地域コーディネーターが舞鶴まで活動範囲を広げると聞いている。舞鶴は昔、丹後であり、舞鶴でありながら神崎地区は丹後の文化であったりする。
- ・民間や文化、スポーツなどは行政的な区分を越えられる。
- ・丹後だけで収まらず、文化的につながる地域とのつながりができて面白いのではないか。舞鶴市も協議会のオブザーバーに入ってもらったらどうか。

#### (4) 情報提供

##### ア 自立のための環境

- ・少子化問題に詳しい山田昌弘氏によると、欧米の家庭では18歳までしか子どもの面倒を見ない。一方、日本は社会に出てからも、7割は同居している。このようにパラサイトシングル（※3）が多い日本は自立心が育ちにくい環境にあるのではないか。
- ・そう考えたとき、丹後には大学がないので、自立心は芽生えやすい環境にあるのではないか。丹後には自立のチャンスがあると言えるのではないのか。

##### イ 香里ヌヴェール学院高等学校について

- ・37歳校長の改革により、かつて1学年90人ほどだったのが今では300人となり、5年間で1000人規模の学校へと変わっていった。特長としたのが海外の大学への入学者数の多さであった。一方で、日本の高校の中には未だに国公立大学の合格者数を広報している学校もある。
- ・また、部活は完全地域移行し、高校教員の負担軽減を図っている。
- ・香里ヌヴェール学院高等学校の実践は学校を再定義するものになっている。

##### ウ 大人の探究

- ・丹後の人々はスノーフレークリーダーシップ（※4）をお祭りで経験しているのではないか。この地域文化を他のところでも応用展開できないか。元々、様々な大人が伴走できる素地があるので、もっと豊かに活動できるのではないか。
- ・例えば、PTA活動を大人の探究の場としてやりたい人がやってみるのもいいのではないか。そうやって様々な大人が教育の伴走をする集団にしていく。そのための先鞭をつける議論が丹後でできるといい。

## エ 杉岡顧問の「子育て」メッセージ案

「丹後の大自然をフィールドに、自然の叡智を自らの生きる力、生き抜く力に変え、先生だけでなく、地域の先達や大人、外部者の生き様に触れながら、子どもたちが、多様な方々と語り合い、学び合い、育ち合い、協働し合い、誇りにし合える学習環境」

※1 アルゴリズム機能で配信された情報を受け取り続けることにより、ユーザーは、自身の興味のある情報だけにしか触れなくなり、あたかも情報の膜につつまれたかのような「フィルターバブル」と呼ばれる状態となる傾向にある。このバブルの内側では、自身と似た考え・意見が多く集まり、反対のものは排除（フィルタリング）されるため、その存在そのものに気づきづらい。

また、SNS 等で、自分と似た興味関心を持つユーザーが集まる場でコミュニケーションする結果、自分が発信した意見に似た意見が返ってきて、特定の意見や思想が増幅していく状態は「エコーチェンバー」と呼ばれ、何度も同じような意見を聞くことで、それが正しく、間違いのないものであると、より強く信じ込んでしまう傾向にある。

(出典：総務省情報通信白書令和 5 年度版)

※2 「コンピテンシー」とは、職務や役割において期待される成果を安定的に発揮する高業績者（ハイパフォーマー）が、共通して持っている知識や技術、能力などの行動特性を指します。行動や思考パターンを分析して模倣することで、高業績者と同様の高い成果につなげられるという考え方です。成果に結びつく行動基準が具体化されることから、さまざまな場面で活用されるようになっていきます。

(出典：リクルート・エージェント Web サイト)

※3 《1990 年代末、東京学芸大助教授だった山田昌弘の造語》経済的に余裕のある親と同居する未婚の若者。特に未婚女性。

(出典：デジタル大辞泉 (小学館))

※4 スノーフレイクリーダーシップは、ある人のストーリーに共感した人が他の人を呼び、チームを構築し、その人が自分のストーリーを語り、他の人を巻き込んでいくことで広がっていくリーダーシップの形態です。スノーフレイクリーダーシップは、雪の結晶のようにリーダーシップを伝播させ、輪を広げていくことを目指します。

(出典：Note 野中健次 #株式会社わけわけ#先生シェアハウス、ため (北海道の IT エンジニアリングマネージャー))

